

< 2020年2月 >

古賀 順子

「エル・グレコ展」

この4月で「パリ通信」100号を迎える。「ベストピア」395号には程遠いが、ごく平凡な私のレポートを毎回快く掲載してくださる小原先生に改めてお礼を申し上げたい。小原先生とは10年以上のお付き合いをいただいている。今回は、ベストピアを通底している先生の姿勢について書かせていただこうと思う。

昨年10月16日から始まったパリ・グランパレ「グレコ展」が2月10日で終了する。1541年ギリシアのクレタ島で生まれたドメニコス・テオトコプーロス(通称エル・グレコ)(1541-1614)。ビザンティン芸術の土壌で育ち、画家として成功する志を抱いて、1567年ヴェネツィアに渡る。ティツィアーノ、ティントレットが活躍するヴェネツィアで、強い後ろ盾のない外国人エル・グレコが入り込む余地はなく、ヴェネツィアからローマへと転地。しかしミケランジェロが君臨するローマでも事情は同じく、ギリシア人画家が成功する希望は薄い。1570年代のエル・グレコにとって、ヴェネツィアとローマはまさにイタリア・ルネサンス芸術習得の地であった。スペインに渡り、トレドで大きく花開くグレコ独特の鮮やかな色と長く伸びた輪郭は、ヴェネツィアの色、ローマの線が知らなければあり得なかった。当時のスペイン王フィリペ2世の庇護を求めてスペインに渡るが、安定したアトリエを開くのはトレドの街であった。

タホ川と自然の地形を利用した城壁の街トレド、エル・グレコが生きた1577年から1614年は中世ヨーロッパの中で最も栄えた街であった。今なお美しい中世の風景を残すトレドで、2014年「エル・グレコ死後400年記念」が行われた。トレドの街全体がエル・グレコ展で、小原先生とマドリッドのプラド美術館を見て、4月7日エル・グレコ命日をトレドで過ごした旅を思い出す。トレド大聖堂、サント・トメ教会、サンタ・クルス美術館、エル・グレコ美術館などをゆっくり見て回ったが、小原先生の一番の目的は一枚の絵だった。かつてトレドのタヴェーラ病院で見た「聖家族」をもう一度見たい、という願いだ。エル・グレコは「聖家族」のヴァリエーションを何作も描いている。「授乳

の聖母」とも呼ばれるシリーズで、聖母マリア、幼子イエス、ヨセフの聖家族に、聖アンヌや聖ヨハネが一緒に描かれるものなど、ひとつの題材で幾つもの作品を残している。タヴェーラ病院のために描かれた「聖家族」は、聖母マリア、幼子イエス、ヨセフ三人の図で、現在はニューヨークにある「The Hispanic Society of America」が所蔵している。

今回パリ・グランパレ「グレコ展」に展示されたこの「聖家族」を前にして、2014年4月上旬の朝、まだ薄い霧が残るタヴェーラ病院への道を歩いたことを思い出した。小原先生が一枚の絵に深くこだわる理由を私なりに考えた。エル・グレコにおいて、ひとつの絵からいくつものヴァリエーションを描くことは創作の根底に繋がっている。「神殿から商人を追い払うキリスト」はその最も端的な例である。芸術家が一つのテーマにこだわり凝縮した作品を残す過程は、小原先生が芸術作品から人生を凝縮するものを求める過程に重なっているからであろう。ヴェネツィア統治下とはいえ、ギリシア人画家がイタリア・ルネサンス芸術を吸収し、トレドで独自の芸術世界を確立する過程は、時代を超えて、新しいものを求めて闘う人間に大きな力を与えてくれる。

毎年コバケン「ベートーベン全交響曲」コンサートを聞き、第九「歓喜の歌」シラーの日本語訳に長年こだわってこられたのも、理由は同じだろう。第九にはベートーベンのすべてが凝縮されている。聴力を完全に失い、同時代の音から遮断され、孤独の中で未来の音を聴いていた作曲家である。人の苦しみ、痛み、悲しみ、喜びに寄り添い、人生と闘う力を与える新しい現代の音楽を開いたからこそ、「歓喜の歌」の意味は小原先生にとって大きな問題なのだろうと思う。

聖書を学び、人のあり方を常に真摯に模索されているからこそ、一枚の絵、ひとつの詩、ひとつの音楽にこだわり続ける姿勢を失わずにおられる。

グランパレ「グレコ展」会場最後を飾る「聖ヨハネの幻視」(または「黙示録第5の封印」)はタヴェーラ病院礼拝堂のために描かれたエル・グレコ最後の大作で、現在はニューヨークのメトロポリタン美術館が所蔵している。6年前に入ったタヴェーラ病院の記憶を辿りながら、一枚の絵の大切さについて考えた。